

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験
「生きていく奇跡」

福岡県・大和青藍高等学校1年 菊池日菜乃

中学3年生の6月中旬、その日私は近所の眼科を訪れていた。4月の眼科検診で斜視と診断されたからだ。私も母も「治療してもらったら治るよ」と軽い気持ちだった。医者からの言葉を聞くまでは……。一時(いっとき)すると私と母は診察室に呼ばれた。診察室に入ると、医者は私と母に「急に斜視になるのは脳に原因がある可能性が高い」と告げ、脳外科に行くよう勧めた。

数日後、私は家族と一緒に半信半疑で脳外科を訪れた。そこでMRIを撮ってもらうと、私の脳に腫瘍があることが分かった。自分でも信じられずとても不安だった。結局、私たちはその日のうちに三つの病院をまわった。しかし、私の脳腫瘍は脳の中心部にあるらしく、近くの大きな病院でも手術は困難だと言われ、最終的には大病院に行くことになった。大病院に着くころには午後8時をまわっていた。そこで私は担当医に「君は、脳腫瘍から水頭症の合併症を併発している。倒れる前に病院に来られて本当によかった」と言われた。また、いつ倒れるか分からないからと、私はその日から入院することになった。私はまだ状況がみ込めなかった。自覚症状はまったくなく、自分に脳腫瘍があるなど思ってもみなかった。ただただ不安になった。次の日から検査が始まった。検査のたびに自分には腫瘍があるのでと思い知らされた。治療については父も母もすぐ悩んでいた。腫瘍がある場所的には、手術療法と放射線療法はできなかつたし、かといって化学療法にすると将来不妊になる可能性が高いと担当医が言っていたからだ。

入院して数日、水頭症の治療を優先して、頭の中の水を抜くために手術することが決まった。

手術当日、朝からいろいろな準備がされていた。手術室に行く時間になった。手術するのは初めてで少し怖かったが、手術室に入って横になり目をつぶった。

次に目が覚めると私は酸素マスクをつけられていろいろな管につながれていた。そして、父と母が心配そうに私の顔をのぞいていた。

それから数日間、私は熱とひどい頭痛で動けなかった。毎日毎日「何で私だけ」と何度も思った。しかし頭痛が治まり、病室を見渡すと私と同じ病気で私よりも病気が進行している女の子がいた。その子は手話を使っていてしゃべれないようだった。私は「病気が進行すれば私もあんなふうになってしまふのか」という何とも言えない恐怖に襲われた。

次の日、担当医から「手術の際、腫瘍を少し取ることができたので、これを調べれば悪性が分かる」と言われた。

数日後、検査結果が出た。結果は、悪性度の低い「毛様細胞性星細胞腫」だった。私と母は「不幸中の幸いだったね」と泣いて喜んだ。そして担当医に「今後は経過観察をして腫瘍が大きくなったら治療を始めよう」と言われ、私は退院することになった。ただ、腫瘍自体がなくなつたわけではないので、半年に1回検診に行かなくてはならなかった。

退院後、今までと同じ今まで通りの生活を送った。でも、私には「腫瘍がもし大きくなつたら」という不安と恐怖が常にあった。

その後、私は実際に病気になつた私だからこそできる看護があるのではと思ひ、看護師を目指して看護科のある高校に入学した。私には自分が病気になるて分かつたことがある。それは生きていくことは当たり前ではないということだ。誰もが大人になるまで生きられるわけじゃないということ、生きてくても生きられない人がいるということ、自分を病気になつて痛感した。また、誰でも病気になる可能性がある。だからこそ今を大切にすべきだと思う。私はこれから病気と共に生きていくのだと思う。だから今やれることは全力でやりたい。いろいろなことにも挑戦したい。だって、今私が生きていられることは奇跡だから。